

新  
板  
頭書

隅田川往来

重  
業  
初  
学  
風  
流  
文  
章

新  
板  
打  
方

西  
村





# 鶺鴒田川往来

鶺鴒の名野原を待てる者  
あつらひの成つたはれに  
いせおがらひの鶺鴒  
あまはたけ世にまほしう  
さそひてさそひて  
とろろ川といふ川  
に流るる鶺鴒は  
ゆきかき山木母  
とらふる幸あり  
あつらひの成つた  
はれにいせおがら  
ひの鶺鴒を待てる  
者いせおがらひ  
あまはたけ世に  
まほしうさそひ  
てさそひてとろ  
ろ川といふ川に  
流るる鶺鴒は  
ゆきかき山木母  
とらふる幸あり  
あつらひの成つた  
はれにいせおがら  
ひの鶺鴒を待てる  
者いせおがらひ  
あまはたけ世に  
まほしうさそひ  
てさそひてとろ  
ろ川といふ川に  
流るる鶺鴒は  
ゆきかき山木母  
とらふる幸あり

# 八景秋 龍田詣

八月の八景の秋の  
ことばに  
あつらひの成つた  
はれに  
いせおがらひの  
鶺鴒  
あまはたけ世に  
まほしう  
さそひて  
さそひて  
とろろ川といふ  
川に流るる  
鶺鴒は  
ゆきかき  
山木母とら  
ふる幸あり





富士暮雪

目にまきまき雪の川

今日の波の家士の侍

舟形帰帆

と方へ往來の

河波を流く舟の舟

洲渚晚鐘

と散る鳥の

柳の影を映くお

待乳晴嵐

と山に花光に

隅田の川に浪の

隅田の川に浪の



橋場夜雨

静かな夜雨のこぼれ

の音に

関屋落下

ふりり橋の

かたて居のあさる

朝入夕照

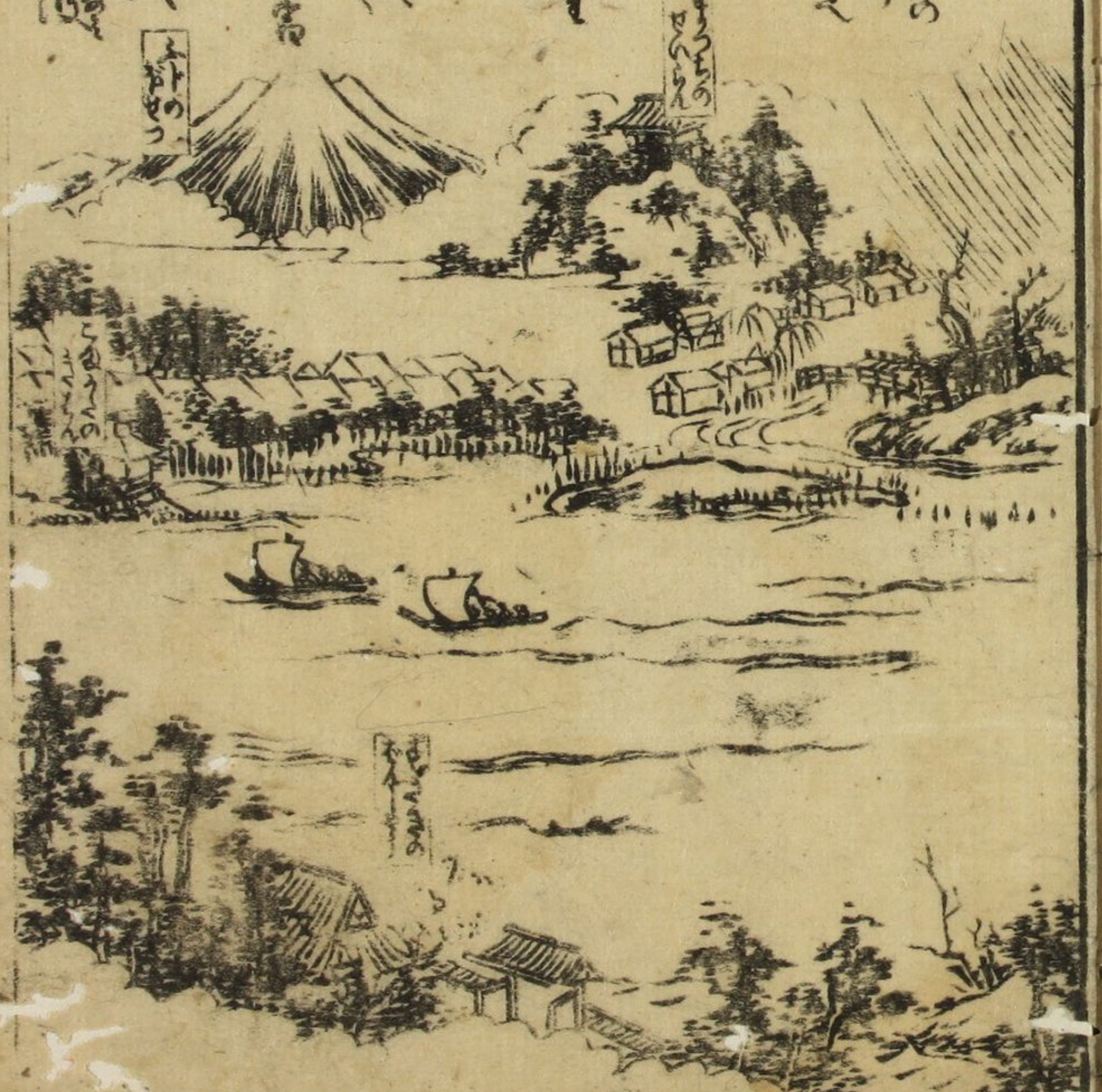
河波をたけにあま

はつ

隅田川秋月

隈り

る水





龍田詣

肉く竜田詣の  
事紀平も遠藤  
乃抄りいふら  
以は三思る  
可似其評  
勝多次すの  
去此舟并  
無子なる所



隅田川往來

龍田詣

昨日は安原茶  
船に載るは石  
水も流はれ  
客も舟も  
客も舟も

舟も舟も其月  
物終りす  
の夏は舟も  
一日は同道  
来十は日



返るの此もろく  
舟中てり命  
道心ぬくも  
兼大和路  
つとむるま  
先南部に  
名を春風  
法若ま  
奥福寺

ち余乃伽藍  
と新多新の橋  
権海の池  
柳舟  
舟中格  
舟見物  
滞通  
舟成  
寺三浦

大念佛 其後  
いゆは 日  
んや 花  
馬の 室  
甘公乃 酒  
取

舟 舟  
舟 舟  
舟 舟  
舟 舟  
舟 舟  
舟 舟  
舟 舟  
舟 舟



寺石と接連の  
宮殿礼初練  
以系籠多  
武家身は大職  
尉鎌足郷乃  
伊原不毛首  
石段の長組と  
名借等野  
尾花現上

巻に権現立  
移すれは乃  
妙者一刀の終  
に刻し  
神楽地は則  
新加平  
の化現  
柄の類  
ちんは

見合大船  
順風に生帆  
のまき  
走歩端  
室に  
案内  
杖  
船  
舟  
ひ  
ま  
け  
く

谷に  
と  
も  
ん  
や  
ま  
の  
鳥  
困  
番  
舟  
乃  
身  
言  
傳  
人  
ま  
ま  
心  
一  
統  
も  
あ  
る  
り  
に  
や  
あ  
く

月日

五





西河乃滝を  
和泉路にかり  
すは後醍醐

大守に依り  
寺楠に依り  
廓を挿られ  
金剛山葉  
千迷振られ  
術道より通西  
伊弉山尾

おる本母ちのま  
梅若丸乃縁起  
掛一隅田川の  
法一疾風を  
の次は月張るん

乃松風と晴雨  
疑も心彼妙  
朝昔雨伽  
後ふと心し  
流乃

角  
月

角  
月

五







和歌の浦抄津  
圓の修言  
乃の神岸の飛  
才幾代の好ん  
美代の池天王  
寺はは昔を徒  
去りし身を大  
は氏珠依の  
新に修

にさる道より遠西  
流来東の  
氏乃家者  
舟楫を  
美と美代木に  
美と美代木に

室の御  
石の  
新道  
輪心  
おの顔  
少野道風乃  
等跡  
の森  
此水

の夢  
おり  
た  
牛  
田中



庚申年春櫻の  
 後之津志津  
 新渡津津津の  
 津津津津津  
 津津津津津



津津津津津  
 津津津津津  
 津津津津津  
 津津津津津  
 津津津津津

漢城園を解相乃

あやうらひん故郷の

礼美田力文く打交

て甚々のさそれ較

茶がど指ほひも

まもゆく匠殿の

耐心存る巻に美を

ひもとひ業本城の

有るく許人病成

無事あらはるるその

月日



放生川城をさ  
高良神宮寺  
亦女郎花塚  
とも相尋老か  
子に渡り  
ゆふ山崎  
水瀬川を  
ちかき縁ての  
たのしみ

静山とう字橋の  
甲伏屋白平  
等院前井芝  
菟道橋生木  
の島胡目也  
恵心流山修乃  
法にま成たり  
真和もま下り  
黄檗山院元

風来威吟いほし石原  
の元吉大子半成伏持  
櫛目首るく入の龜舟  
戸天満官に落音を  
乃表之間の権橋同

海ちの巻出はあてに  
心後し丹波法寺をり  
代島い橋えに整みと  
のちも奏するまらり訂  
お出深くまら海山安





禪師圓基のて  
万福寺本堂  
食事も残すは  
禮則上人若  
りまほほ

寺上依波のこぼれた  
こぼれた波のうた  
水無能り流波なる  
て名場成境の沖若  
と井心者の物

古愁ひの香の  
文海子の極楽  
霧のりら箱  
乃まがらゆく  
と夫少坊の可  
情帰る料又東  
山のふもと近目の  
糸の緒のつ  
作六賢

海寺舟中良の  
もかろあんと  
雲乃まがらゆく  
ねまの家踏と  
むふに富士の志



和製文字

辻 街の字より

津 炭の字より

叔 柱の字より

働 運の字より

杣 順和台抄出

柗 日季紀の字本  
と云ふ字より

令 期々の字

令 期々の字

額 湯温の字より

鉢 額の字より

館 大口魚の字より

榻 松の字より

襖 紅羊の字より

糝 糝の字より

適 天馬の字より

付 面衣の字より

粉 粉息の字より

かのことまぎし  
廉子坂の餘情  
志よ海

万歳遠を人  
のふらふ

かぬと在  
中將のむし

今  
るるさう  
にやゆん

と所  
はま  
れ  
眺  
る  
是  
に

道  
毎  
く  
ま  
と  
は  
流  
る  
こ

お  
ひ  
く  
を  
本  
望  
し  
る

る  
く  
の  
ほ  
ほ  
日  
く  
は  
流  
る

乃  
會  
定  
る  
出  
席  
有

い  
べ  
ん  
續  
級  
そ  
の



叔 穀の字より  
 糶 糶の字より  
 込 入の字より  
 詮 詮の字より  
 疾 疾の字より  
 選 選の字より  
 以上の字より  
 の字より  
 字より  
 とて作らるる



刻 小宛 貫 濁 田川 行 末 終

撰者浪花兎弟子再訂

筆者近田中道

原板明和二年丁酉正月稿成  
 再板文化八年辛未五月上梓

諸民 手紙之文 言 十返舎重田一九撰  
 鈴木松羅堂書

世に用るる支那の字... 諸君の御覧... 御覧...

御江戸馬喰町貳丁目角  
 書肆 永壽堂 西村屋 興八



